

# 象限儀

能村 研三

登四郎青森の思い出

十月二十三日に「沖」の青森支部が発足することになった。コロナ禍で、地方で行う大きな行事が開催されなかったのも、しばらくぶりの大きな大会になり多くの皆様とお会いできることを楽しみにしている。

「沖」が創刊して間もなくの昭和四十六年の夏、私はまだ大学生であったが、当時流行っていた「カニ族」を真似て、十数日間北海道を一人で旅した。その後、青函連絡船に乗り、父と落ち合ってから青森を旅行した。青森といえばその時のことを思い出す。

当時、登四郎の大学時代の友人で「沖」にも投句されていた三浦壽緑さんがおられ、下北半島の尻屋崎と津軽半島の竜飛岬をご案内いただいた。特に尻屋崎近くの恐山に行った思い出は印象深く、登四郎も俳句を詠んでいる。

一樹なき死者の山より道をしへ  
しじみ蝶ふたつ先ゆく子の霊か  
登四郎は自註で「二人の子を歿し

夕 星 や 貝 風 鈴 の 音 乾 き  
廃 業 に 踏 ん 切 る 店 の 秋 簾  
涼 新 た 蔵 階 段 の 下 り 急  
秋 風 と 秋 気 の こ も る 蔵 座 敷

胸 の 内 明 か さ ぬ 簾 名 残 り かな

風 素 秋 成 す べ き こ と の 時 間 割

手 渡 し に 夕 刊 貫 ふ 女 郎 花

秋 澄 佐原吟行 む や 四 千 万 歩 の 象 限 儀

辻 々 に 山 車 の 引 き 跡 秋 気 澄 む

先 生 の 眼 差 し の ま ま 菊 作 り

ている私にはこの山に子供たちの霊が住んでいるような気がしてならなかった」と述べている。

また、竜飛岬はまだ青函トンネルの工事が始まった頃で、北の果ての荒涼とした海が印象的であった。ここでは登四郎は、

海峡の中ほどくらし野分波

という句を詠んでいる。

五十年近く前のことなので、今より交通事情が悪かったのに両方の半島を旅することができたのは、三浦さんの熱心なご案内のお陰である。

支部長に就かれる小野寿子さんは青森を訪問した翌年に「沖」に入会されているので、三浦さんのこともおそらくはご存じであろう。

馴染み深い青森の支部発足に、登四郎も泉下で喜んでるに違いない。

今回は青森市内で支部発足の記念会を開いた後、翌日は弘前方面に吟行するが、次の機会には青森支部を拠点に尻屋崎や竜飛岬にも旅してみたいと思っている。

能村 研三